様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６１５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０１０６

研究課題名（和文）荻生徂徠とその一門の音楽思想－「楽」から見る江戸思想史－

研究課題名（英文）The Musical Thought of Ogyu Sorai and his School--Edo Intellectual History as seen from the Perspective of Music (Gaku)

研究代表者
小島　康敬（KOJIMA, Yasunori）

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：７０１０１５９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：荻生徂徠とその一門の音楽演奏に関する実態を詩文集から明らかにし、また彼らの「礼楽」に関する言説の分析を通して、彼らの音楽思想を考察した。
その結果、徂徠一門では「楽」への関心が極めて高く、また楽理研究においても高度な水準に到達していることが判明した。特に徂徠においては「古楽」の復元・復興を通して、社会の統治を構想していることが明確になった。

研究成果の概要（英文）：In this study, the practice of musical performance by Ogyu Sorai and his disciples has been clarified from their collections of poems and prose. Also, through the analysis of their discourse of "rites and music," their ideas on music are discussed.
As a result, it could be said that Sorai and his disciples shared strong interest towards music, and were very much capable of structuring highly advanced musical theories. Especially, in case of Sorai, he had in his mind the ideal form of social governance through the resurrection of "kogaku," or ancient music.

研究分野：日本思想史

キーワード：荻生徂徠　太宰春台　音楽思想　萱園学派　礼楽　古楽　江戸思想史　徂徠学

１．研究開始当初の背景
これまでの江戸時代の儒教受容に関する研究においては、様々な視点から数多くの研究の蓄積がなされてきた。しかし、音楽の視点からの儒学受容に関してはこれまでほとんど研究がなされてこなかった。こうした研究の手薄な部分に光をあてることによって、日本における儒教受容に関して、「楽」という視点を取り入れることによって、従来の通念化された江戸儒学思想史研究に一石を投じる。

２．研究の目的
（１）本研究の目的は徂徠とその一門において、「楽」（音楽）がどの程度彼らの日々の実践活動に取り入れられていたのか、また音楽をめぐる彼らの言説にはどのようなものがあったのか、音楽と社会との関係性をいかに捉えていたのか、総じて彼らの音楽思想を明らかにすることを目的とした。

（２）その際、「楽」だけではなく、「礼」との関係性を念頭においた、音楽の位置づけの考察が重要となってくる。すなわち、「礼楽」思想というセットの中で彼らの言説を分析することが課題となってくる。

（３）孔子が説いた「詩」「書」「礼」「楽」のうち、「詩」については文学の領域において多くの研究蓄積があり、「礼」及び「礼の言説」に関する研究についても少なからざる研究成果がある。儒教が「礼教」として、堅苦しいイメージを醸しだし、それが今にも及んでいるのは儒教が主として「礼」との絡みで考究されてきたからであろう。しかし、孔子は教養の最後の完成は「楽」にあると説いているように、音楽を極めて重視している。孔子は常日頃から瑟を嗜み奏していたし、また弟子達も師にならって音楽の実践に励んだ。こうした儒教における「楽」文化の側面が江戸の知識人社会で具体的にどのように受容されたのかを明らかにすることが必要であるとの認識に立って、本研究は構想された。

３．研究の方法
（１）徂徠及び徂徠一門の音楽活動を明らかにすべく、彼らの詩文集から音楽に関する記事を蒐集する。対象とする詩文集は以下の通り。『徂徠集』『春臺先生紫芝園稿』『周南先生文集』『南郭先生文集』『東野遺稿』『金華稿刪』等々。

（２）上記の漢文詩文集の中から音楽関連記事を抽出し、それらを訓読・読解し、徂徠一門における音楽受容の実態を明らかにする。

（３）徂徠及び一門の音楽に関する言説を内在的に分析し、彼らの音楽思想を再構成して、そのことの有する思想的意義を考察する。

４．研究成果
（１）徂徠一門の音楽への関わりを考究する前提として、孔子と音楽との関わり方を考察した。
「子曰く、詩に興り、礼に立ち、楽に成る」。『論語』泰伯編での孔子の言葉である。「詩」を詠むことによって、人はまず興奮をおぼえ、「礼」を習うことによって、社会的立場を確立し、「楽」（音楽）を聞くことによって、人間の教養を完成させる。すなわち、孔子は「詩」と「礼」と「楽」（音楽）を人間の学びの必須のものとした。「詩」「礼」「楽」を学ぶと言っても、それはそれらの事柄についての様々な知識を単に情報として収集するといった、現代のような薄っぺらな学びではなく、「詩」を自ら詠じ、「礼」を自ら踏み行い、「楽」を自ら奏する、実践を伴う学びであった。その点でその学びは、「知を愛すること」それ自体を純粋に求めた古代ギリシアのそれとは趣を異にしていた。もちろん、孔子は学び自体に伴う純粋な知的悦びを十分認めていた。しかし、学びの意義はあくまでもそれらを超えたところに設定されていた。「知」は「徳」とリンクすべきものであり、学問は人格陶冶に与かるものと考えられた。孔子は常日頃から琴（七弦琴）を奏し歌唱していたし、弟子達も師にならって楽器を演奏していた。
　なぜ孔子は常日頃から音楽を尊重したのか。『孝経』には孔子の語として「風を移し俗を易ふるは、楽より善きはなし」とあるが、これは風俗と音楽との相互連関性に着目した言葉である。歌は世に連れ、世は歌に連れという言い方がされるが、歌は世相の反映であるとともに、歌そのものが世相を方向付けてゆくという面もある。確かに音楽は言葉以上に心に訴えかけてくるものがある。人は音楽の力によって、癒され、奮い立たされ、喜ばされる。孔子は「礼」とともに「楽」のこうした隠れた力をもって人々の心を善き方向へと導こうとしたのである。もっとも、「楽」によっては逆に人の心を良からぬ方向へと誘引してしまうことも大いにあり得る。殊更に扇情的な音楽は孔子の時代にも当然あった。鄭という国の歌曲がそれで。そこで孔子は鄭の歌曲は淫らであるから人々に歌わせない方が良いとまで言っている。孔子は確かに音楽を愛好した。しかし、と同時に、彼にとって音楽は個人的趣味や好悪の次元を越えて、君子の教養たる「詩書礼楽」の一つとして学ぶべきものであり、更には「礼」とともに民衆を教化し、天下国家を統治する為の大きな柱だった。
　以上のような古代儒教に見られた考え方に立ち返って、「礼楽」論を前面に押し出して自説を展開したのが江戸期の儒者荻生徂徠である。

（２）徂徠一門の詩文集に散見する漢詩を検

証すると、音楽に関す記載が少なからずある。それらを解読すると、会読会の合間、誕生日の祝賀会、祭日の行事、旅先での一興、送別会などなど様々な場面で音楽の演奏をしていることが判明する。一例をあげれば、徂徠の弟子山県周南が長州に帰る時に徂徠一門が集まって隅田川で送別の宴が催されたが、その時の様子を周南自身が漢詩で次のような旨を詠じている。

「浅草は金龍山の麓、隅田川に舟を浮かべ、宴を張って楽を奏した。炎暑のさなか、音楽は心を洗い清めてくれる。水しぶきがあがり、川面には青い波が立つ。盃を酌み交わしては、風流な興趣を吟じた。笙鼓は舟歌を引き立たせ、次々と詩は賦され、酔いは既にまわり、軽やかな舞いに裾は翻る。歓楽は、今日、この日、ここにある」。笙鼓を奏しながらの隅田川での船遊びの情景を髣髴させる。この周南の詩には序が付されておりそこには、船遊びの参会者（徂徠一門）は十人余り、その多くは琴の名手蔡琰、笛の名手桓伊の技を会得した者達である、と記されている。自慢もあろうが、徂徠一門の演奏の腕前は相当なものであった。

詩文集を見る限り、安藤東野、山県周南、太宰春台が笙・笛を得意としていたことが判明する。徂徠一門は儒学における「楽」を単に知識として受容するだけではなく、自ら演奏するといった、実践レベルで受容していたことが明瞭となった。

（３）徂徠一門は文学サークルという面がこれまでの研究で明らかにされているが、と同時に音楽愛好サークルであったという側面も見逃してはならない。蘐園の仲間は事あるごとに集まっては、酒を酌み交わし、詩を吟じ、楽を奏で、時には舞った。酒と詩と音楽この三つは蘐園という知的共同体を読み解くキーワードである。

（４）彼らが音楽を愛好したのは、音楽が単に好きだったという趣味の問題に終わらせるのではなく、その背後にある儒教思想、すなわち「礼楽」思想との関連で捉えることが必要である。

（５）徂徠にとって、統治の最高形態は朱子学のような徳治主義でもなく、法家のような法治主義でもなく、「礼楽」による統治であった。つまり「礼楽」による統治は道徳的説教や刑罰による社会統治と違って、先王が建てた文化的仕掛けによって、知らず識らずのちに秩序形成をはかるものである。

（６）「礼」は社会に「節」（秩序）をもたらすもの、「楽」は社会に「和」（調和）をもたらすものと考えられ、音楽の効用が考究された。徂徠によれば、聖人は「礼」と「楽」とをセットにして人々を導いた。なぜなら「礼」の厳格さだけでは人は萎縮してしまう。楽しみのうちにこそ人間は成長する。音楽こそがその楽しみを担う。だから「徳」を養い成長させてゆく上で「楽」に優るものはない、

（７）徂徠にとって、「楽」は「徳」を養う最高の「術」であった。そうである以上、徂徠はすべての「楽」を許容するわけではなかった。徂徠は「古楽」、即ち中国古代の先王が制定した「聖人の楽」と「世俗の楽」とを区別し、前者の「古楽」をこそ正しい音楽とした。

（８）『琴楽大意抄』には「和」と「応」という概念をもって、「古楽」と「俗楽」との違いが詳細に論じられている。徂徠によれば、「古楽」と「俗楽」の相違は、「古楽」には「和」があるが、俗楽には「応」しかなく、「和」がないので、俗楽は低級低俗な音楽である位置づけられる。「同」とは質・類を同じくするものの同一性を意味し、「和」とは質・類を異にするものの調和を意味する。この概念の区別は、複数の人が同じ音程で同一の旋律を歌う斉唱（「同」）と複数の人が音程を異にする複数の旋律を歌うことによってハーモニー（「和」）が生じる重唱・合唱との違いをイメージすると分かりやすい。

（９）徂徠にとっては、聖人が策定した「楽」だけが正しい楽（「古楽」）であった。その場合、問題となるのはそういった「古楽」が既に亡くなってしまっているという事実である。しかし、徂徠は「古楽」を求め続け、ついに孔子の遺作とされる七弦琴の文字譜である『幽蘭譜』の写本を閲覧する機会を得る。それを読解してその譜が「明朝の琴譜」とは大いに異なることを認め、中国で失われてしまった「古楽」が日本に残っていることを確信する。これが一つの契機となって、徂徠は「古楽」の復原に力を注ぐ。更に徂徠は、琉球からの使者が江戸上りの際に奏する琉球の歌に関心を示して、その歌詞や曲目、楽器について書き留めているが（『琉球聘使記』）、これは琉球の歌謡に「古楽」が保存されているのを見出さんとするものあった。

（１０）徂徠の音楽に関する知見は『楽律考』『楽制編』に示されているが、同書には徂徠が音律・楽理に関して高度な知識と一家言を有していたことがよく分かる。

（１１）師徂徠にならって、その一門が「楽」を愛好し、実践することにはなるのは当然のなりゆきであった。中でも太宰春台が音律、演奏においても抜きんでていた。

（１２）太宰春台は朝鮮通信使と面会したおり、通信使に向かって独自の音楽論を披瀝し、日本には「古楽」が残存しており、その演奏をもって使節の人々の心を慰めたいと述べているが、その背景には東アジアは「礼楽」

文化を基盤とした「先王同文の治」のもとにあるとの認識があった。

（１３）春台は音楽こそが人の心の在り方に決定的にかかわるものであるとの強い信念を持っていた。音楽こそが人の心の方向付けに決定的に与る。音楽は一人の心を善導するだけではない、社会総体の気風ともいうべき「風俗」の在りようにも決定的な意味をもつ。『孝経』に「風ヲ移シ俗を易ルハ楽ヨリ善キハ莫シ」とあるように、「音楽ヲナシテ楽ムヨリ民ノ風俗自然ニ移リ易ル者ナリ」。音楽は知らぬ間に人の心を方向付ける。とすれば人の心を淫蕩へと誘引するような「俗楽」「淫楽」は断固否定されなければならない。とすれば、残された道はただ一つ、強権をもって「婬楽」を禁止する以外にはない。春台は『独語』という随筆で、日本での音曲の流行廃りを述べながら、当世流行している浄瑠璃と三味線を徹底的に排斥しています。三味線と浄瑠璃が流行してからというもの、「江戸の男女淫奔すること数を知らず」と憎々しげに綴っている。

（１４）徂徠の礼楽思想に更に推し進めた人物として熊本藩の水足博泉に着目した。徂徠は礼楽の制作権を幕府に求めたが、博泉は京都の朝廷にこれを求めた。これは思想史的な流れとして言えば、朝廷こそが礼楽制作の主権者であることを鮮明に打ちだした山県大弐の思想につながっていくものと考えられる。徂徠学と朝廷、もしくは尊王思想との関係は今後検討されていくべき重要な研究課題である。

（１５）徂徠が礼楽を「道」として捉えたのに対して、博泉は礼楽を「器」であると捉え直している。礼楽とは聖人が制作した「道」であるとする徂徠説よりは、博泉のように礼楽とは聖人が普遍的な「道」に依拠して制作された「器」であるとした方が確かに常識的で理解しやすい。彼は無形の原理としての「道」と有形の事物としての「器」とを峻別したが、「道」に対して「器」を軽視するわけでは決してない。この「器」という概念こそが彼の思想のキーコンセプトになっている。

（１６）博泉は形而下の「器」を学ぶことを通してしか、形而上の「道」に到達できないことを執拗に説いて、「器」への学習と習熟を強調したのである。博泉は、詩書礼楽とは「道」を盛る「器」であり、その「器」への習熟という回路を通してしか、「道」に到達できないと考えた。そして「器」という道具立ての点において、詩書礼楽の中でも、「詩」が最も天然（自然）に近く、「書」「礼」という順で自然から遠ざかり、「楽」が最も「文」であるとして、音楽を人間文化の究極にあるものと位置づけたのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 小島康敬　伊藤仁斎の＜私＞さがし、『研究東洋』第５号　2015、pp12-18
② 小島　康敬、「華夷パラダイムを越えて」、『グローバル時代の東アジア平和思想』査読無　2013、pp413-418
③ 小島　康敬、「礼」と「楽」とによる統治―荻生徂徠の統治理念　『国際学術論壇』　2013、pp352-372

〔学会発表〕（計８件）
① 小島　康敬、東アジア教養としての「礼楽」文化、2015 年 3 月 16 日、政治外交班研究会、愛知大学国際中国学センター、愛知大学（愛知県名古屋市）
② 小島　康敬、蘐園一門における「楽」の受容―徂徠・春台・博泉、2015 年 1 月 11 日、伝統音楽研究会、京都市立芸術大学（京都市）
③ 小島　康敬、伊藤仁斎の＜私＞さがし、第 26 回大成聖先師孔子祭記念講演、2014 年 6 月 20 日、東日本国際大学（福島県いわき市）
④ 小島　康敬、「礼」と「楽」とによる統治―荻生徂徠の統治理念―、国際学術論壇、2013 年 11 月 30 日、北京（中国）
⑤ 小島　康敬、華夷パラダイムを越えて学校法人昌平黌創立 110 周年記念学術活動第 5 回日中韓国際学術シンポジウム、2013 年 6 月 23 日、東日本国際大学（福島県いわき市）
⑥ 小島　康敬、荻生徂徠の君子像、国際李退渓学会国際学術大会、2012 年 8 月 18 日、大邱（韓国）
⑦ 小島　康敬、Chong Tasan and the Sorai-Gaku as seen in East Asia History of Ideas、　丁茶山 250 周年記念国際シンポジウム、　丁茶山学術団体、　2012 年 7 月 6 日、　ソウル（韓国）
⑧ 小島　康敬、荻生徂徠一門の音楽嗜好とその礼楽観、International Forum on Gyeonbuk Identity for Communicating with the World、2011 年 6 月 5 日、安東（韓国）

〔図書〕（計２件）
① 小島　康敬　他、ぺりかん社、「礼楽」文化、2013、　419
② 小島　康敬　他、岩波書店、日本の思想第七巻儀礼と創造、2013、332

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

６．研究組織
(1)研究代表者
小島　康敬（KOJIMA, Yasunori）
国際基督教大学･教養学部・教授
研究者番号：70101590